

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月13日現在

機関番号：12102
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22500562
 研究課題名（和文）卓越した球技スポーツ選手における実践知の獲得過程に関する質的研究
 研究課題名（英文）The developmental process of learning applicable technique and skills: a qualitative study based on the narratives of prominent ball game players
 研究代表者
 會田 宏 (AIDA HIROSHI)
 筑波大学・体育系・准教授
 研究者番号：90241801

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、卓越した球技選手における実践知の獲得過程について明らかにすることであった。選手へのインタビュー調査を質的に分析し、以下の知見を得た。

(1) 実践知は、コツとの出会い、コツの理解、コツの消失、コツの獲得という過程を通して獲得される。(2) 球技における戦術力の養成では、動作そのものを志向してその習得を目指すことと、対峙する選手との「対話」を志向して前意識的に動作することの2つが求められる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to understand the process of how applicable technique and skills develop regarding individual tactics in prominent ball game players. Using qualitative methodology, the interviews with players were analyzed and the following points were identified. (1) Applicable technique and skills of the interviewee developed in several stages, including the encounter, the understanding, the loss, and the acquisition of skills. (2) The cultivation of individual tactical capacity in sports requires two things: an orientation toward the movements themselves with an aim to acquiring them, and an orientation toward “dialogue” with the opponent and ability to perform movements pre-consciously.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：ハンドボール方法論

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学，スポーツ科学

キーワード：コツ身体知，カン身体知，公共化，行為者の視点，偶発位相

1. 研究開始当初の背景

スポーツにおいて動きを指導する場面では、「動きがどのようになっているのか」といった客観的な情報だけでなく、「どのような感じで動くことができるのか」といった主観的な情報、すなわち実践知としての動きのコツを選手に伝えることが効果的である。動きのコツは、選手固有の身体や運動感覚能力と深

くかかわっており、同じような動きができて個人間で異なることも多い。そのため、動きのコツは、指導実践現場では研究の必要性が指摘されていた (Dale, 1996; 阿江, 1999; ヘベル, 2001) にもかかわらず、客観性がないという理由から国内外を問わず、ほとんど研究されることはなかった。その傾向は、状況判断、相手とのかけ引き、味方とのあわせ

といった戦術的な要素が指導場面で強調されることが多い球技において強かった。

本研究代表者は、これまでに、質的研究の方法を用いて一流競技選手の実践知を知識化する研究を進めてきた。国際レベルで活躍したハンドボール選手が獲得した実践知にアプローチした研究では、卓越した選手における個人戦術とは、対峙する選手と相互主体的関係を結び、間主観的に相手選手と「対話」しながら行為自体を変化させていくことができる前意識的な営みであることを明らかにした。

しかし、一流競技選手の実践知は、運動形成の最高レベルである「自在位相」(金子, 2005)における運動感覚能力を理解するためには役立つものの、まだ自分なりの動くコツをとらえきれていない選手やその指導者、すなわち育成段階および導入段階にある選手や指導者にとっては、レベルが高すぎて「参考にならないコツ」になったり、習熟を妨げる「早すぎるコツ」になってしまう危険性をはらんでいる。そこで、一流競技選手における技術・戦術的な発生を当該スポーツ種目における成功例ととらえ、実践知の獲得過程を、新たな動きの獲得に試行錯誤していた「原志向および探索位相」、偶然にその動きができた「偶発位相」、いつでもその動きができるように繰り返し練習した「形態化位相」に着目して例証的に明らかにし、その共通性と相違性を分析することは、それぞれの習熟段階に応じた効果的な指導法を探る手がかりとなる。

2. 研究の目的

(1) 球技選手における実践知の獲得過程を提示する質的研究の方法の開発

球技における一流競技選手が持つ実践知の獲得過程に関する語りを、選手と対話的に、共同的に生み出す質的研究の方法について開発する。

(2) 球技選手における実践知の獲得過程に関する事例の提示と解釈

開発した方法を、国際レベルで活躍し、現在は現役を引退している一流競技選手に適用し、競技生活の中で「運動ができるようになる勘どころ」「運動感覚に支えられた身体の知恵」が形成されていく過程を事例として提示し、解釈する。

(3) ジュニア期における球技選手の指導への提言

本研究で得られた結果をもとに、技術・戦術学習の育成段階にあるジュニア期における球技選手の効果的な指導に役立つ知見を実践現場に提供する。

3. 研究の方法

(1) 球技選手における実践知の獲得過程を提

示する質的研究の方法の開発

質的研究では、インタビュー、エスノメソドロジー、参与観察、フィールドワークなど、多様な方法が研究目的に応じて用いられており(フリック, 2002)、単一の研究方法が確立されているわけではない。それゆえ、球技選手における実践知の獲得過程について検討する際には、まず質的研究の科学性が保持でき、行為者の視点からそれを提示できる方法についてあらためて検討し直さなければならない。ここでは、質的研究に関する先行研究を概観しながら、球技選手における実践知の獲得過程を提示できる具体的方法を開発した。

(2) 球技選手における実践知の獲得過程に関する事例の提示と解釈

開発した方法を用いて、ハンドボール、サッカー、バレーボールなど、さまざまな球技種目の競技選手15名を対象に、実践知の獲得過程に関するインタビュー調査を行った。調査に先立ち、すべての研究協力者に研究の趣旨を説明し、調査への協力を依頼し、承諾を得た。すべての発言はMDレコーダを用いて録音し、デモンストレーションはデジタルビデオカメラを用いて撮影した。

MDレコーダ記録からすべての発言内容を文章におおすとともに、VTR記録から身体を使って表現された動きをイラスト化した。実践知の獲得過程に関する語りを研究協力者ごとに質的に検討し、実践知の獲得過程を事例的に示した。

(3) ジュニア期における球技選手の指導への提言

本研究では、実践知の獲得過程の中で「偶発位相」(動きのコツと出会う最初の段階)において特徴が見られた。そのため、インタビュー調査で得られた研究協力者の語りを「偶発位相」に着目して解釈し直し、戦術力を構成する2つの要因、すなわち技術力と戦術的思考力の養成という観点から、ジュニア期における効果的な指導について考察した。

4. 研究成果

(1) 球技選手における実践知の獲得過程を提示する質的研究の方法の開発

① 実践知を実践現場のリアリティが反映されるように検討するには、実践知を客観化して対象としてとらえるのではなく、行為者の視点からとらえ直し、動感身体知に支えられている実践知を単なる机上の構想と区別する必要がある。

② 球技における実践現場で指導者や選手が用いている動きのコツとは、戦術思考力が身体化されたカン身体知と技術力が身体化されたコツ身体知が統一された身体知であることがとらえることができ、球技における実践知はこの意味の動きのコツという言葉を手が

かりにアプローチできる。

③ 具体的には、動きのコツを手がかりにした内省、語りによるコツ身体知とカン身体知の外化、調査者と研究協力者による語りの共同産出、語りの内容に関するメンバー・チェック、個別事例の具体的様相の解釈といった調査の手続きを行なうことで、実践の説明と解釈の精度の向上、反証可能性および語りの内容の妥当性および信頼性の保障といった、質的研究における科学性を保持しつつ、個人戦術におけるカン身体知とコツ身体知を行為者の視点を持って公共化できる。

本研究において開発した質的研究の方法は、質的研究の科学性を保証するように、行為者の視点を持つように考慮した手続きである。これは、科学的・客観的分析がなじまないと言われていた実践知を対象とした研究に多くの実践者、科学者が参加できる契機になると考えられる。

なお、これらの研究成果については、以下の論文で発表した。

會田 宏 (2012) トレーニング科学において事例を研究する手続き—球技における実践知を対象とした質的研究を手がかりに—。トレーニング科学, 24 (1) : 3-9.

(2) 球技選手における実践知の獲得過程に関する事例の提示と解釈

① ハンドボール、サッカー、バレーボールなど、さまざまな球技種目の競技選手 15 名を対象に、実践知の獲得過程に関するインタビュー調査を行った。それぞれの研究協力者の語りを質的に分析した結果、球技における実践知の獲得では、まず「何も意識しないで動作ができる（できてしまう）段階」から始まり、次に「動作そのものを意識してできるようになる段階」を経て、最後に「相手の意図を意識してそれに応じた動作が前意識的にできるようになる段階」へと到達することが明らかになった。

② インタビュー調査で得られた研究協力者の語りを「偶発位相」（動きのコツと出会う最初の段階）に着目して質的に分析した結果、個人戦術に関する実践知を発生させるためには、カンもコツも働かせなければならない状況の中でトレーニングを行う必要があることが明らかになった。その理由として、身体知を構成するカン身体知とコツ身体知はゲシュタルトクライスの関係を形成しているため、それぞれを絶縁的に養成しても「できる」という実践知は生まれてこないことが挙げられた。

一流競技選手との対話によって得られた本研究の知見は、従来の球技における技術・戦術トレーニングの理論的枠組みに一石を投じる発見的な言説であると考えられ、スポーツ運動学、トレーニング学、コーチング学

などの研究領域において、一流競技選手を対象とした事例研究の重要性を認識させる契機になると考えられる。

なお、これらの研究成果については、以下のシンポジウムで発表した。

會田 宏 (2012) コツ身体知とカン身体知の峻別と統合を目指したハンドボールの指導。第 25 回日本スポーツ運動学会大会シンポジウム「運動学の授業の工夫とそのポイント」, 2012 年 3 月 26 日, 筑紫野市・大観荘 (福岡県)

(3) ジュニア期における球技選手の指導への提言

① 球技における個人戦術力は、技術力が身体化されたコツ身体知と戦術的思考力が身体化されたカン身体知の統一的な行為であるために、技術力と戦術的思考力のそれぞれを要素還元的な考え方に基づいて絶縁的に養成し、後からそれらを統合させるという方法は適切ではない。

② 球技における技術力を効果的に養成するためには、ゲーム状況を解決する十分な動作の獲得とその動作の自動化を目指す中で、「対峙する相手選手と相互主体的関係を結び、間主観的に対話できるように」という上位の目的を設定するとよい。

③ 球技における戦術的思考力を効果的に養成するためには、相手や味方選手との対応力や適応力の向上を目指す中で、「対峙する相手選手の行為に適切に対応するリアクションの行為を可能にする動作を習熟させた上で」という条件を設定するとよい。

④ 個人戦術力の養成では、意識して習得・修正した動作をゲームで前意識的に発揮し、前意識的に発揮した動作を省察し、練習で意識的に修正するといった繰り返しが効果的である。

本研究で得られた知見は、球技における戦術力の養成、すなわち技術力と戦術的思考力の養成では、それぞれの個別の目的に上位の目的や条件を設定することで、技術的な達成と同時に戦術的な問題を処理できるようになることを示しており、技術・戦術学習の育成段階にあるジュニア期の選手を指導するために役立つと考えられる。

なお、これらの研究成果については、以下の論文で発表した。

會田 宏 (2012) 球技における個人戦術に関する実践知の理解の仕方。スポーツ運動学研究, 25, : 17-28.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

① 會田 宏 : 球技における個人戦術に関する

る実践知の理解の仕方。スポーツ運動学研究, 第 25 号, 17~28, 2012 査読有

② 會田 宏, 富本栄次: 卓越したセンタープレーヤーにおける 1:1 の突破に関する動きのコツ。ハンドボールリサーチ, 第 1 巻, 17~23, 2012 査読有 (日本ハンドボール学会賞受賞)

③ ネメシュ ローランド, 會田 宏: ハンガリーにおけるハンドボールの一貫指導システム: 7歳から 12歳までの指導プログラムに着目して。ハンドボールリサーチ, 第 1 巻, 31~39, 2012 査読有

④ 會田 宏: トレーニング科学において事例を研究する手続き一球技における実践知を対象とした質的研究を手がかりに。トレーニング科学, 第 24 巻第 1 号: 3~9, 2012 査読無 (依頼論文)

⑤ 山田永子, 會田 宏, 中川 昭: 女子ハンドボール競技におけるヨーロッパ強豪国と日本のユース年代のトレーニング比較一特にシュートに着目して一。コーチング学研究, 第 25 巻第 1 号, 77~90, 2011 査読有 (日本コーチング学会奨励賞受賞)

⑥ 會田 宏, 船木浩斗: ハンドボールにおけるコーチング活動の実践知に関する質的研究: 大学トップレベルのチームを指揮した若手コーチの語りを手がかりに。コーチング学研究, 第 24 巻第 2 号, 107~118, 2011 査読有

〔学会発表〕(計 3 件)

① 會田 宏, 橋本行弘, 下川真良: サイドシュートを決めるコツ・阻止するコツ。日本ハンドボール学会第 1 回大会, 2013 年 3 月 9 日, 駒澤大学深沢キャンパス (東京都)

② 會田 宏: 現場を内側から理解することを目指した実践研究。スポーツ実践研究推進シンポジウム「体育・スポーツ界における実践研究の重要性とその方向性」, 2013 年 2 月 9 日, 筑波大学東京キャンパス (東京都)

③ 會田 宏: コツ身体知とカン身体知の峻別と統合を目指したハンドボールの指導。第 25 回日本スポーツ運動学会大会シンポジウム「運動学の授業の工夫とそのポイント」, 2012 年 3 月 26 日, 筑紫野市・大観荘 (福岡県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

會田 宏 (AIDA HIROSHI)

筑波大学・体育系・准教授

研究者番号: 90241801

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし